

# 六花



2010

平成22年

俳句雑誌りっか

Cover designed by L&Ls Ltd

1月号

い 一番の下足札なる初湯かな

ろ 六段の調べ眠たし初詣

は 初春や持ち歩きゐて墨と筆

に 庭先にまはりて声を年賀客

ほ 誉められてゐしは読声恋歌留多

へ 蛇皮の財布を当てに福袋

と 虎刈りの子が横綱ぞ喧嘩独楽

ち 地ビールの注ぎつぶりよし女め正月



り 林道の雪掻いてより斧始  
ぬ 塗り込めし窯の火ほぐち口ぐちや鏡餅  
る 涙腺のもう閉まらざり福笑  
を 拝む手の息に湿るや初日の出  
わ 若水の竹筒に満ち来たる音  
か カルメ焼に目を丸くして晴著の子  
よ 夜の雨に爆はぜ音たつるどんだかな  
た 樽酒を鏡割りして女正月

いとけなく春着の袖を揺らしをり

ろ 炉に据ゑし鉄瓶の湯気淑気なる

は 羽子板の紅さしなほし飾りけり

に 荷を担ぐ武骨な肩に初日かな

ほ 頬杖をついて年酒を注ぎ足しぬ

へ へなへたと正月の凧揚がり初む

と 灯火の地より滲みて去年今年

ち ちんまりと座せる幼き年賀客



り 鱈粉の如き塩かな 鮎鯛  
ぬ 縫ひ物の指を休めず 去年今年  
る 類焼の跡に 初日の遊びをり  
を 折り取りし梅添へ 仕上ぐ節料理  
わ わなわなとふるへる指で 初御籤  
か 髪ほどきふいに 溜息つく二日  
よ 夜よよの奥に 潜む朝や 去年今年  
た たわたわと 初湯を揺らしをりにけり

# 菊の香の指に残りし夕支度

池崎るり子

きくのかのゆびにのこりしゆうじたく いけざいるりこ

菊一輪花びら厚く重たげに

鍋料理かかせぬものに焼き豆腐

枝豆の根つきのままを売られをり

朝刊のバイクの音や今朝の秋

台所で夕餉の支度をしていたら、指に残っている菊の香りがしてくる。いやな匂いではないけれど、料理に匂いが移るのではないかと気になりながら包丁を使っているのである。台所に入る前に菊を剪って生け花にしたのだろうか。仏壇に献花したのであろうか。台所に入ってから菊を触った手を何度も洗ったのだが、菊の香りは一向に洗い流せず、仕方なく夕支度を始めたのである。などと読者は掲句から連想するのである。夕支度という言葉にも品がある。

霧

笹村 政子

断崖を登り来し霧匂ひけり  
朝霧の無きかに薪を運びくる  
アルプスの霧より現るる急斜面  
靴あとの深くのこれる林檎畑  
山小屋の名残の手摺秋深む

虫の闇

松本文一郎

虫を守る庭園灯の薄明り  
虫の闇しばし補聴器外しけり  
盆帰省ごろ寝の兄の鬼籍入り  
堀越の色変へぬ松昼の月  
老いの身は急がば回れ初嵐

せつ じゆ しゆう  
雪 樹 集

毘沙門

武田美雪

田の中にうどん屋のあり草紅葉  
菊日和大師の母の御寺かな  
毘沙門の堂守は尼冬紅葉  
一樹全て落葉したり仏母院  
古き名の村なくなりぬ里神楽

街灯

出口

誠

何もせぬままに帰りぬ運動会  
連休に机上汚され秋の朝  
行く秋の街灯眩し住宅地  
紅に部屋まで染めて秋朝日  
園中の落葉集めて「これ・ごはん」



# 蛍雪譚 六甲

虫の音のかわきはじめる夜は寒し

菊谷 潔

虫を詠むのは主として虫の姿ではなく、鳴き声（音）。だからこそ生半可な聞こえかたでは却って平凡さが面に出て陳腐になるおそれがある。しかし掲句は「乾いた音」に変化してきた虫の音を感じ取ったのである。その乾いた鳴き声は読者にも寒さを伝えてくれるのである。

床下の乾く亀裂や九月尽

大内 幸子

床下の泥が乾いて亀裂が走っている。通常は床下を覗くことは少ない。水害で水浸しになった床下だからこそ乾き具合を見てみた。夏が過ぎて秋も後半にかかっているのに流れ込んで乾いた泥の亀裂が水禍の生々しい記憶を刻んでいる。九月尽というのは九月を惜しむ気持を含んだ季語であるが、掲句の場合はもう九月も過ぎようとしているのに、という嘆きの心地である。大内さんが水害に遭ったという事実を知っているからこそ鑑賞できる内容だが、水害に遭遇していない場面でも九月尽の感じはある。

# 六花集 会員作品

村時雨降りたる後の鐘の声  
椎の実の落ちて時雨るる夕べかな  
こほろぎとまことの月を眺めけり  
虫の音のかわきはじめる夜は寒し  
行く秋や煎餅布団にだんご虫

菊谷 潔

園児画の展示列車や花野駅  
床下の乾く亀裂や九月尽  
子等の声夕日の中へ秋の果  
遠目には植田と思ふ穠かな  
泥かぶりなすがままなる倒れ稲

大内 幸子

庫裏の戸を隠すばかりに乱れ萩  
秋彼岸卒塔婆の墨匂ひをり  
追ひつきし夫の行年菊薫る  
呼び捨てで声かけられし柿の坂  
寝ることに疲れて仰ぐ鰯雲

平居 滢子